ＩＣＴ活用による個別最適な学習推進モデル事業報告書（令和５年度～令和７年度）

岡山県立東岡山工業高等学校

１　はじめに

本校は創設以来、地域に根ざした工業高校として、ものづくり人材を育成し、社会貢献を果たしてきた。近年、ものづくりにおいてもグローバル化が進み、製造現場に外国人労働者が増えると同時に日本企業の海外進出も進んでいる。

本校では、グローバルな視点を持ち、多様性を尊重し、持続可能な社会づくりに貢献できる生徒の育成を目標に掲げ、平成 27 年度から令和６年度まで「グローバルプロジェクト」に９年間取り組み、留学生や外国語指導助手（ＡＬＴ）に対して「ものづくり in English」等の取組を行ってきたが、生徒たちの英語に対する意識、学力は、非常に多様な状況である。

このような状況の中で、生徒の英語に対する意識を改革し、英語力を向上させ、併せて、生徒一人ひとりの自己肯定感、主体性の育成を持続的な取組において図っていきたいと考えている。

令和５年度から岡山県教育委員会の「ＩＣＴ活用による個別最適な学習推進モデル事業」のモデル校として指定を受け、令和５年度入学生を対象に英語４技能を学習できるアプリ「English 4skills」（ＮＴＴコミュニケーションズ）を活用した個別最適な学習を進めた。しかし、「English 4skills」のサービス終了の知らせを受け、令和６年度からは、本事業において現３年生の学習習慣・基礎学力の確実な定着等を図っていくことを目的に、使用アプリを「ＤＭＭ英会話」（ＤＭＭ）に変更し、生徒一人ひとりの学習到達度に合致した個別最適な学習を実現するための取組を推進することとなった。

２　事業研究の概要

（１）研究主題

１人１台端末と学習アプリ（令和５年度：「English 4skills」、令和６年度～令和７年度：「ＤＭＭ英会話」を活用した個別最適な学びの実現

（２）研究体制

学校全体で取り組むため、プロジェクト拡大委員会は 22 名で構成している。（副校長、英語科、学年主任、該当学年各専門科担任、情報管理部、教務課長、教務主任、事務会計担当者）

（３）研究計画

①令和５年度（１年目）

アプリの導入と生徒の実態に合わせたアプリの活用方法を研究する。

- 生徒の興味関心やニーズを調査し、研究主題・年間計画を設定する。
- プロジェクトチームを立ち上げ、チームを中心として先進校視察を行う。
- 英語科を中心に、アプリを用いた教科指導の研究を行う。１年生は 10 月に全員リスニング英検を受けるため、１年目は特にリスニング力の強化を目指して取り組む。
- ヘッドホン等の必要な機材を揃える。
- 担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒へのフィードバックを行う。
- 生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
- 外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
- 年４回（４月・７月・12 月・３月）県教委・ＮＴＴコミュニケーションズ・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
- １年目の成果報告会を実施し、２年目の研究に向けて意見交換や改善を行う。

②令和６年度（２年目）

学習習慣の定着を図る。（学習量をこなし、学習への取組が習い性となることを目指す）

- 生徒のアプリ活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関等について、プロジェクトチームで分析を行う。
- 英語科を中心に、アプリを用いた効果的な教科指導を研究・実践する。
- 担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒一人ひとりへの個別支援を行う。
- 生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
- 外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
- 年４回（４月・７月・12 月・３月）県教委・ＤＭＭ英会話担当者・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
- モデル校間での情報交換を行う。
- ２年目の成果報告会を実施し、３年目の研究に向けて意見交換や改善を行う。

③令和７年度（３年目）

基礎学力（特に英語力）の向上と知的好奇心の伸長を図る。

・生徒面談やアンケート調査を実施し、生徒の学習意欲や学習時間の変化等を記録する。
・生徒のアプリ活用状況と各種テスト、学習実態調査との相関等について、プロジェクトチームで分析を行う。
・英語科を中心に、アプリを用いた効果的な教科指導を研究・実践する。
・担任を中心とした学年団による学習状況把握と生徒一人ひとりへの個別支援を行う。
・外部講師、アドバイザーによる指導助言・意見交換を行う。
・年３回（４月・７月・12 月）県教委・ＤMM英会話担当者・外部有識者等との調整会議を実施し、進捗状況やアプリ活用の改善等を確認する。
・モデル校間での情報交換を行う。
・３年目の成果報告会を実施し、本研究の結果を他校へ普及させる。

３　１年目（令和５年度）の取組等

（１） 令和５年度の取組

① 「English 4skills」の運用開始

ア　教員研修

令和５年４月、英語科と１年団の教員全員を対象に、ＮＴＴコミュニケーションズによる「English 4skills」の活用に関する研修を実施した。

イ　学年団会議での意識合わせ

令和５年５月、1 年団会議で本事業の目的を説明し、英語のアプリ活用ではあるが、組織図を示し学年全体で取り組むことを確認した。

ウ　学年集会

令和５年６月に「English 4skills」スタートアップ学年集会を開催した。

（２）「English 4skills」の活用

「English 4skills」は英語４技能と文法を学ぶことができる。生徒が個別に取り組む問題は種類もレベルも自由に選択させたが、基礎力診断テストの結果を踏まえ、全体では英検５級レベルの問題から開始した。

① 授業

６月から授業の最初 10 分程度を使った学習を開始した。生徒全員に解かせる問題を指示し、指示した問題以外は自分の好きな問題を自由に取り組ませた。

取組が定着してきてからは週１回のペースでリスニング演習に取り組ませ、その結果をリスニングのパフォーマンステストとして活用した。

10 月以降は、授業においてライティングを中心に週１回 10 分程度取り組ませた。リスニング演習はパフォーマンステスにも活用した。

② 家庭学習課題

週末課題としてリーディングとライティング問題を配信した。配信した課題を定期考査の出題範囲に含め、取り組ませた。未提出者には教科担任から指導した。

夏季休業課題として、スピーキング 50 問、リスニング 50 問、冬季休業課題としてスピーキング 23 問、リーディング問題 30 問を配信した。春季休業課題としてスピーキング 27 問、リーディング９問を配信した。課題未提出者には、教科担任だけでなく、クラス担任も指導に加わった。その結果、提出率はほぼ 100％となった。

４　令和５年度の成果

（１）家庭学習時間

学習実態調査における家庭学習時間は４月の 32.5 分から 10 月では 47.0 分に増加した。

（２）英語に関する意識調査

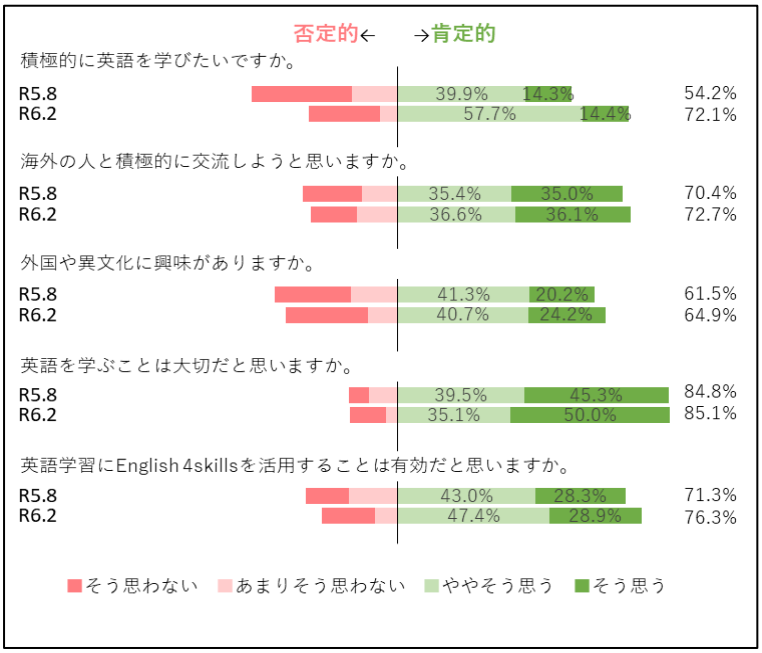
意識の変容を見るために８月と１月にアンケートを実施した。英語に関する意識はいずれの項目も上昇した。特に積極的に英語を学びたい生徒の割合は 20％近く上昇した。

（３）学習到達度

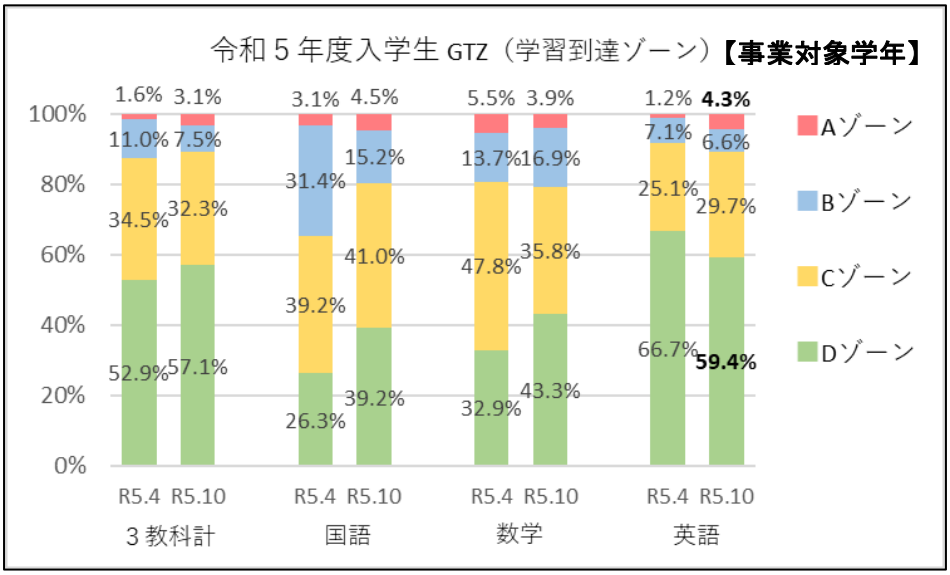
ＧＴＺ（学習到達ゾーン）に関しては、例年であれば回を追うごとに増加するＤゾーンが、英語においては減少が見られた。英語はＡゾーンの割合も増加しており、学力の全体的な引き上げが見られた。

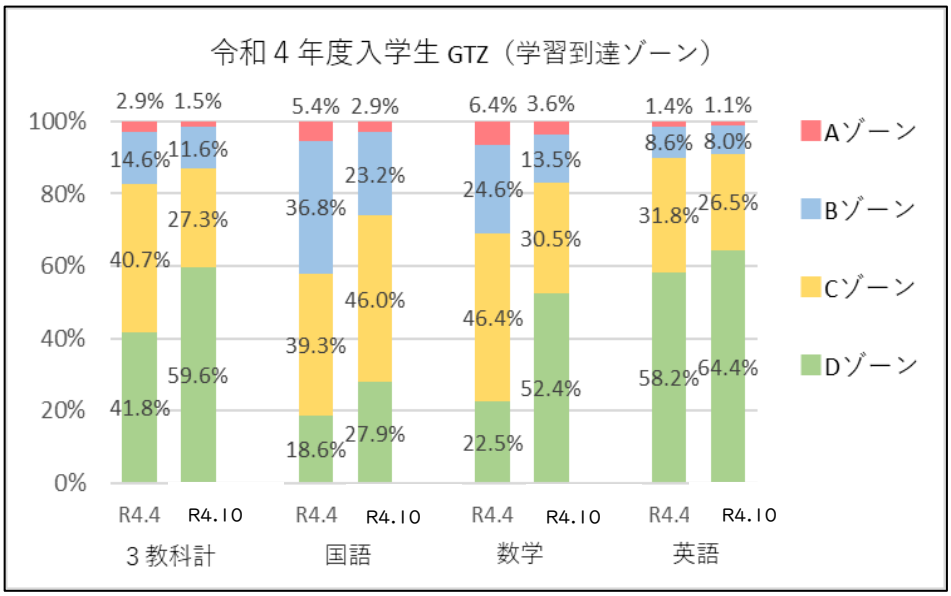
また、国語、数学においても、10 月結果では下降しているものの、概ねＤゾーンの減少が見られた。

【英語に関する意識調査の結果】（令和５年８月・令和６年２月）



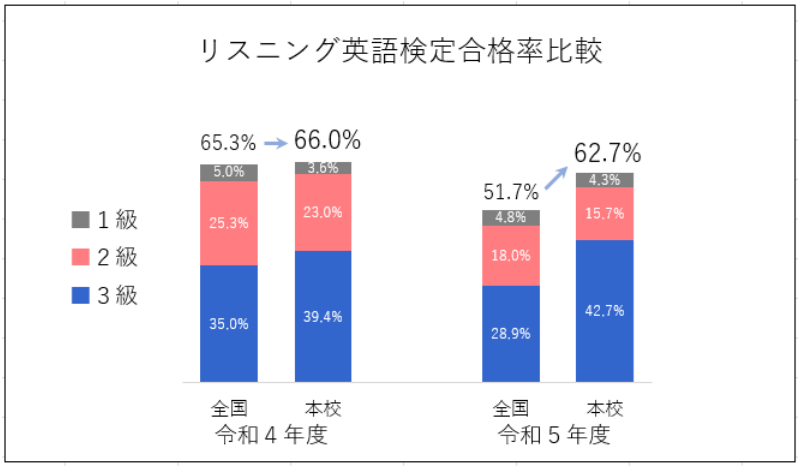
【ベネッセ基礎学力診断テストの結果比較】





（４）リスニング英語検定（全国工業高等学校長協会主催）

リスニング英語検定は、全国平均合格率との比較では、昨年度よりも格段に高くなった。また、１級合格率も上昇した。



（５）課題

本事業の一番のメリットは、生徒一人ひとりが自分の伸ばしたい分野を自分にあったレベルでいつでも学習し、その結果学力が向上することである。しかし、授業や課題以外に主体的にアプリを活用した学習に取り組む生徒数は少なく、いかに意識付けをしていくかが課題となった。

５　２年目（令和６年度）の取組

（１）使用アプリの変更

本年度から、本事業において現２年生の学習習慣・基礎学力の確実な定着等を図っていくことを目的に、使用アプリを外国人講師とのマンツーマンのオンライン英会話や日常会話を中心とした様々な学習ができる「ＤＭＭ英会話」（ＤＭＭ）に変更し、個別最適な学習を実現するための取組を推進することとなった。

（２）令和６年度の取組

①　プロジェクト委員会

令和６年５月、校内に「ＤＭＭ英会話プロジェクト拡大委員会」を組織し、「令和６年度実施計画書」「令和６年度目標シート」の内容について確認することで取組の方向性を確認した。

またＤＭＭ英会話から講師を招聘し、アプリを有効に活用して、生徒の英語力向上につなげていく方策について教職員間の共有を図った。

10 月の拡大委員会では、アンケート調査による生徒の意識の変容、データの分析内容等の共有を行い、今後の校内における組織的取組について教職員間の意志統一を図った。

②　教員による県外先進校視察

令和６年６月から９月の期間に、英語科教員が「ＤＭＭ英会話」を効果的に活用している県外の先進校を視察した。

視察内容は次のとおりである。

視察先	視察日	参考になった取組等
福井県立武生東高等学校（福井県）	令和６年６月 17 日	・ＤＭＭ英会話の利用法についてはお互いに情報が交換できた。ＤＭＭ英会話の利用できる機能や授業内、外でのＤＭＭ英会話の活用法など、今後に向けて多くの情報交換を行うことができた。
向上高等学校（神奈川県）	令和６年８月 27 日	・ＤＭＭ英会話での取組や成果を定期考査等にどのように活用、反映させていくのか等、指導と評価の一体化も視野に多くの示唆をいただいた。また、ＤＭＭ英会話受講後、校内でのスピーキングテスト時の発話量の増加や生徒の英語使用への抵抗感は確実に薄れている様子が大変印象的であった。

神戸松蔭中・高等学校 （兵庫県）	令和６年９月 12 日	・ＤＭＭ英会話を探究と関連付けたり、他教科で学んでいることについて各国の講師にインタビューしたりすることで、ＤＭＭ英会話を「目的」ではなく、「ツール」として活用していた。授業の中で時間を保証することも生徒にとっては大きな安心材料となっている（平日は毎日英語の時間で取り組ませる）。土日、長期休暇は各自で自由に毎日取り組み、やる気のある生徒はどんどん上達していた。
北川村教育委員会 北川村立北川中学校 （高知県）	令和６年７月 17 日	・ＤＭＭ英会話をより有効活用していく方策やアドバイスをいただくと同時に、実施体制として、教育委員会と現場の教員が同じ方向に向かってそれぞれの持ち場で協働する重要性を再認識できた。また、普段から風通しの良い関係性を職場で作ることが大事であることを確認した。

③ 授業におけるＤＭＭ英会話の活用

ア　事前スピーキングテスト

令和６年６月、授業時間を使ってＤＭＭ英会話のスピーキングテストを実施した。スピーキングテストは初級から中級レベルまでの問題構成となっているため、本校の生徒には解くことができない問題が大半を占めることが予想された。

そのため、ＤＭＭ英会話導入時に生徒の英語学習へのモチベーションが損なわれることを避けるため、英語科でスピーキングテストの流れやサンプル質問等を英語と日本語で示したワークシートを作成し、事前指導を入念に行った。

この事前スピーキングテストは、ＤＭＭ英会話アプリ導入時の生徒の学力がアプリの問題レベルと合致しているかをチェックするという目的もあり、テストに欠席した生徒に対しては後日実施した。

イ　オリエンテーション

ＤＭＭ英会話の利用開始に際し、令和６年６月から、全クラスの授業においてＤＭＭ英会話利用の目的やＤＭＭ英会話の機能について丁寧なオリエンテーションを行った。特に、ＤＭＭ英会話に包含されている英語の語彙力強化を目的としたアプリ「iKnow」等の機能の活用方法や振り返りシートの活用方法について説明し、学習意欲の喚起を図った。

ウ　外国人講師との英会話レッスンに向けた準備

外国人講師との英会話レッスンメニューには、基礎的な内容の「発音練習」「会話」から、発展的な「Daily News」「文学」「英検・ＴＯＥＩＣ・ＴＯＥＦＬ・ＩＥＬＴＳスピーキング対策」「フリートーク」などがある。初めのうちは、講師の発音をモデルにリピートを行う「発音練習」を中心にレッスンを受講し、慣れてくると生徒の興味関心に合わせて、自由にレッスンメニューを選んで予約させた。自由にレッスンメニューを選択できるようになっても、基礎的なレッスンばかりを選択する生徒が多かったため、英語科でレッスン内容について協議し、次のように生徒側から外国人講師に発信する仕掛け作りを行った。

a　レッスン開始時に、外国人講師に必ず自己紹介を行う

b　準備していたインタビューやフリートークをしてから、レッスンを開始する

例）講師の好きな自国の伝統料理について
好きな音楽、アニメ、マンガ、スポーツなどについて（各自選ぶ）
講師の国の観光スポットについて（修学旅行で訪れた場所や講師に勧めたい日本の観光地についてのスライドを作成し、オンラインレッスン中にスライドを共有しながら講師へプレゼンテーションする）

徐々に、外国人講師主導のレッスンから生徒主導のレッスンへの移行を目指し、生徒側からの発信の機会を増やしていくことで、レッスン時間が楽しく充実したものになったと話

す生徒が増加した。

エ　外国人講師との英会話レッスン

生徒は外国人講師との１対１の英会話レッスンを１回 25 分、年間 10 回行うことができる。

アプリ利用開始６月当初は「苦手な英語で外国人講師とマンツーマンで 25 分間の会話する」と聞いただけで、恐怖心をかきたてられ、前向きに取り組もうとしない生徒も多かった。

そのため、英語科で何度も計画を練り、授業の中で、高校生が就職するある企業の労働者の６割が外国人労働者であるといった例を挙げながら英語の必要性を繰り返し話したり、実際のレッスンの様子等を動画で見せて安心させたりする等、レッスン前のオリエンテーションを丁寧に行なった。英語を話すことは怖くない、分からなくても大丈夫、講師の先生は優しい、慣れてくる、伝わると楽しくなる、と繰り返し生徒に伝えた。

オ　レッスンで使えるフレーズ集の作成

英語科教員が、「レッスンで使えるフレーズ集」を作成し、授業において活用をするなど取組の充実を図った。この「レッスンで使えるフレーズ集」は生徒に大変好評で、外国人講師とのマンツーマンのレッスンには、お守りのように握りしめている生徒もいた。

カ　家庭学習（夏期休業中における取組）

年間 10 回の外国人講師との英会話レッスンのうち、３回を夏期休業中に取り組む課題として設定した。１学期の授業中に行っていた「レッスンの予約」と「レッスン」を、生徒に全て一人で行うことを求めたことが原因で、レッスン消化率は非常に低調であった。その後、夏季休業明けに教科担任及びクラス担任から未受講者へリマインドを行ったが、家庭でのレッスン実施率は思うように上昇しなかった。

家庭における外国人講師との英会話レッスン実施が難しい理由として、「予約の方法を教わったが一人で行うのは難しい」「教科担当の先生に質問できない環境の自宅で、予約やレッスンを行うのは不安でハードルが高すぎる」等の意見があった。

そこで、取り組ませ方を修正し、生徒がひとりで予約・レッスンを実施できるまで当面（年度内）は、授業の中でのみレッスンを行うこととした。

キ　授業公開及び研究協議の実施

令和６年 11 月 20 日（水）に研究成果の普及を目的として授業公開及び研究協議を実施し、他校から 10 名の参加があった。

本事業のこれまでの取組について説明し、小西聡子指導教諭によるＤMM英会話を活用した外国人講師との英会話レッスンを行う授業を公開し、研究協議を行った。

（３）令和６年度の成果

① 導入アプリ（ＤMM英会話）の活用時間（１日平均）

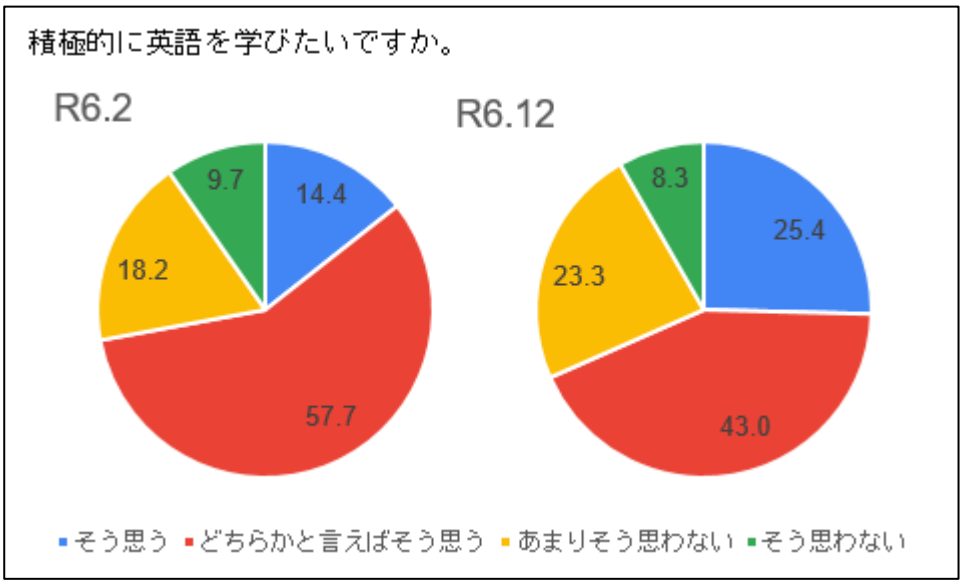
外国人講師と英会話レッスンに向け、家庭学習にアプリ「iKnow」等を活用させた結果、生徒に対して 実施した調査結果からは、導入アプリ（ＤMM英会話）の活用時間の平日の平均は、令和６年８月の９分から 12 月は 12 分に伸びた。

② 英語に関する意識調査

本校が独自に実施した英語に関する意識調査では、ＤMM英会話による外国人講師との英会話レッスンを繰り返すごとに、「積極的に英語を学びたいですか」という問いに「そう思う」と回答した生徒の割合は、本年２月には 14.4％であったが、12 月には 25.4%に増加した。

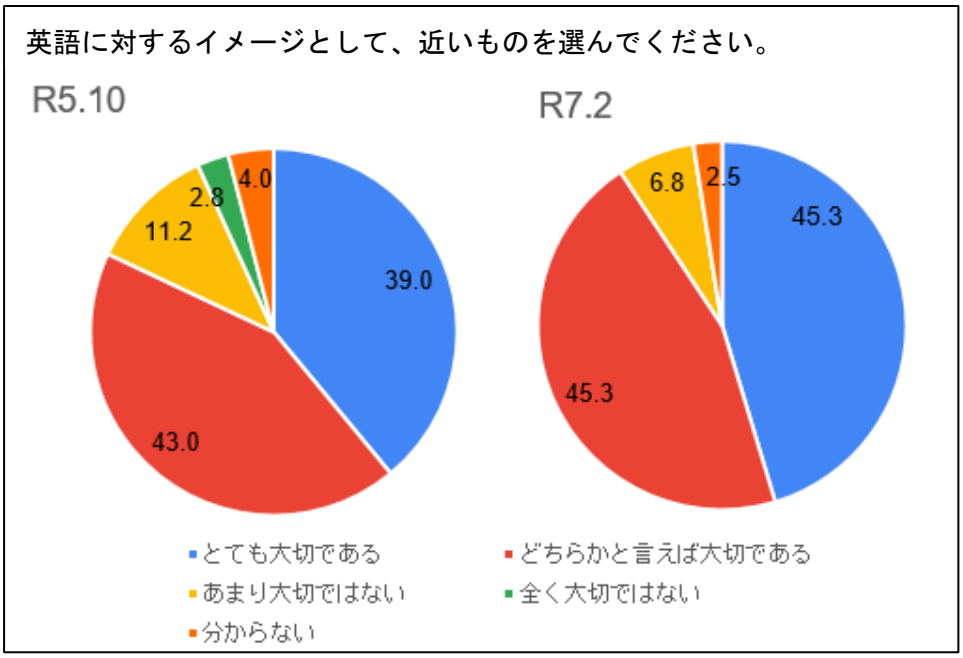
また、約 70％の生徒が外国人講師と英語で会話することに抵抗感なく取り組んでいると回答しており、多くの生徒が自分の将来を見据え、英語を学習することの意義を感じるようになった。

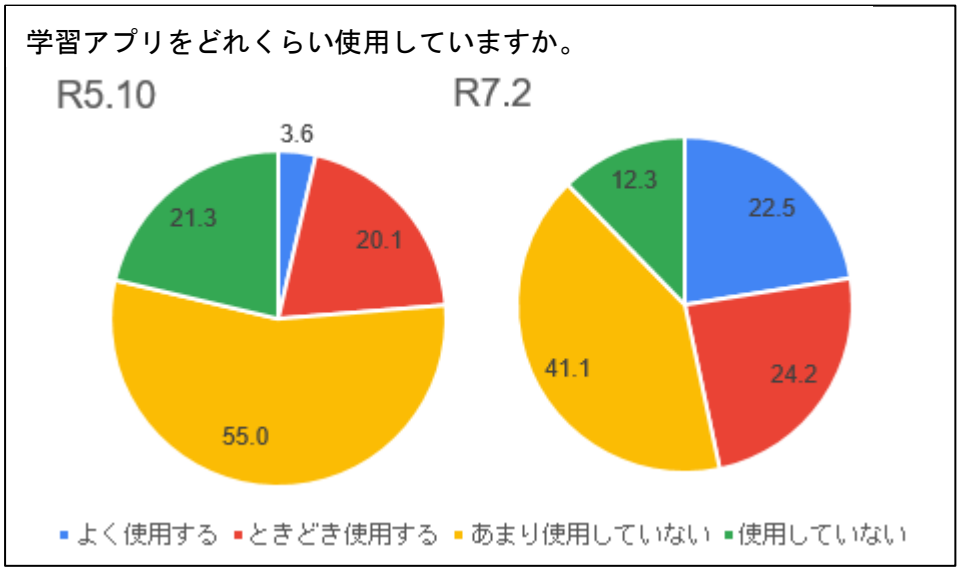
【英語に対する意識調査結果の一部】
（R6.2 n=249、R6.12 n=240）

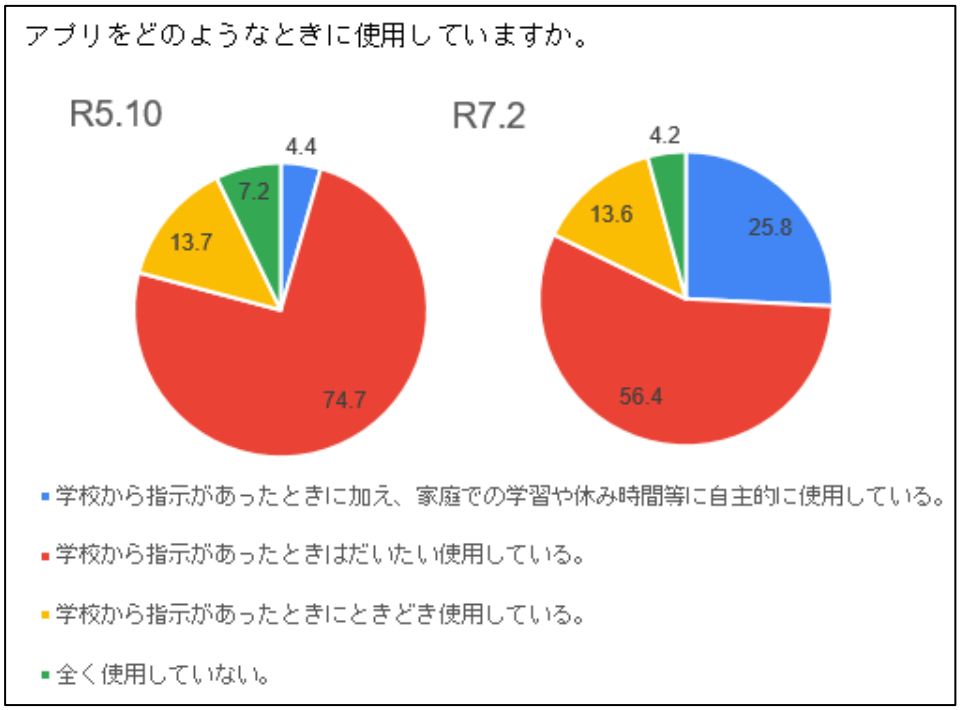


さらに、県教育委員会が実施した本事業に関する生徒の意識調査からは、英語に対するイメージについて「とても大切である」と回答した生徒の割合は、令和５年 10 月には 39.0%であったが、令和６年２月には 45.3%に増加した。また、使用アプリの活用頻度も「よく活用する」と回答した生徒が 3.6%から 22.5%に大きく増加する等、生徒の学習に変化が生じた。また、アプリをどのような時に使用していますかとの問いに「学校から指示があった時に加えて、家庭での学習や休み時間等に自主的に使用している」と回答した生徒の割合が 4.4%から 25.8%に大きく増加しており、一人ひとりが個別最適な学習方法を身に付けながら主体的に学習するようになっていることがうかがえた。

【ＩＣＴ活用による個別最適な学習推進モデル事業生徒意識調査結果の一部】
（R5.10 n=249、R7.2 n=236）







③　受講に抵抗を感じていた生徒に対する個別指導（面談）

令和６年６月から、受講に抵抗を感じていた生徒（３名）に対し、継続的に個別指導（面談・支援等）を実施した。

外国人講師との英会話レッスンのためのスライド作り、クラス内でのプレゼンテーション活動など、ＤＭＭ英会話に付随する活動で自信を付けることができ、３名の生徒のうち１名は自宅受講、２名は２学期の終わりまでにはクラスで通常受講が出来るようになった。

このような生徒の成長は、教科担任だけでなく、クラス担任や英語科での連携によって個別指導（面談・支援等）を実現することができた。

④　「ものづくり in English」

本校では、平成 29 年度から「東工グローバルプロジェクト」（ものづくり活動を中心としたグローバル人材育成）を実施している。生徒の視野を世界へ広げ、成長につながる実践になるよう様々な取組を実施しており、その一つが「ものづくり in English」である。

「ものづくり in English」に参加した生徒は、例年であれば１学年 20 名程度であるが、

令和６年度は、DMM英会話アプリを活用している２年生の参加が最も多く 39 名であった。（全体 68 人中 39 名）２年生の感想の中には、以下のような非常に前向きなものがあった。

【生徒の感想（２年生の一部)】

・英語で外国人と喋っていると楽しい。DMM英会話と同じように、事前に考えてきた質問はかなりうまくいった。しっかり計画を立てて挑んだため、あまり直感的に会話をすることが出来ていなかったので、今後は、直感的な会話が出来るぐらいに英語を学んだほうがいいと思った。
・DMM英会話以上に、外国人と対面で直接会話したほうが楽しいことがわかった。
・自分が担当しているものづくりの作業について、相手に英語でうまく伝わったみたいで嬉しかった。
・あまり単語などは分かりませんでしたが、なんとか頑張ってジェスチャーで伝えることができたと思うし、英会話は本当に楽しかった。次回も外国の人と英語で喋りたい。

⑤ オンラインレッスンでの生徒の変容（教師の見取り）

多くの生徒がレッスンを重ねていくうちに、少しずつ外国人講師との会話に慣れ、英語に対する恐怖心が薄らいできたことがうかがえた。レッスン前にはとても緊張した様子だったが、レッスンが始まると徐々に笑顔になり、最後は満面の笑みで「Thank you! See you!」と画面の講師に向かって手を振る生徒の姿が見られるようになった。日頃の授業では、見ることの出来ない笑顔であった。

２月の最後のレッスンにおいては、全員が「フリートーク」を選択して受講し、25 分間講師との会話を続けることが出来たクラスもあった。修学旅行のプレゼンを通して、その内容を材料に話を膨らませたり、講師の好きな観光スポットを尋ねたりなど、最後まで話題を欠くことなく話し続けることが出来た。アプリ導入時と比較すると、笑顔で 25 分間講師と対話する生徒の姿がとても頼もしく感じた。

⑥ ＧＴＺ（英語）が伸びた生徒

本事業における取組により、基礎力診断テストの学習到達度（ＧＴＺ）の伸びが顕著な生徒のアプリの活用状況や日常的な取組等について追跡した。

ア　生徒Ａ（男子）　入学時よりＧＴＺが５段階アップ【 Ｄ２　→　Ｃ３ 】

ＧＴＺ（英語）の変容	入学時（令和５年　４月）	Ｄ２
	２年次（令和６年 10 月）	Ｃ３
アプリの活用状況	１年次（English 4skills）	平日活用時間平均　５分
	２年次（DMM英会話）	平日活用時間平均 10 分
生徒に対する聞き取り（生徒の回答）	English 4skills、DMMに積極的に取り組んだからＧＴＺが上がったのだと思う。１年生の時には英語の基礎力がつき、それにより２年生になってDMM英会話で１年に習ったときの英語力を出すことが出来、実際には話すことで、より英語力がつき、英語がより身近な存在になった。	
その他特記事項	アプリは、学校から指示があった時だけでなく。家庭学習に自主的に活用している。	

イ　生徒Ｂ（男子）　入学時よりＧＴＺが４段階アップ【 Ｄ１　→　Ｃ２ 】

ＧＴＺ（英語）の変容	入学時（令和５年　４月）	Ｄ１
	２年次（令和６年 10 月）	Ｃ２
アプリの活用状況	１年次（English 4skills）	平日活用時間平均 10 分
	２年次（DMM英会話）	平日活用時間平均 10 分
生徒に対する聞き取り（生徒の回答）	何度も英語の課題を見て、単語を少しでも多く覚えられるようにした。アプリでは自分で読むことができない英語も講師の先生に読んでもらえたので、とてもわかりやすかったし、自分の好きなタイミングですることが出来たので良かった。繰り返し解き直すこともできたのでとても良かった。 ２年生になってからは、英語のアプリをたまに活用していた。リスニングではメモをできるだけ取らずに話の内容に集中してい	

	た。中学校に学んだ単語などがそのアプリを通してもう一度学習できるので、取り組んだ分、自分の頭に知識をたくさん取り入れることが出来た。
その他特記事項	アプリは学校から指示があった時に使用している。

ウ　生徒Ｃ（男子）　入学時よりＧＴＺが４段階アップ【 Ｃ１　→　Ｂ２】

ＧＴＺ（英語）の変容	入学時（令和５年　４月）	Ｃ１
	２年次（令和６年 10 月）	Ｂ２
アプリの活用状況	１年次（English 4skills）	平均活用時間平均 24 分
	２年次（ＤＭＭ英会話）	平日活用時間平均 39 分
生徒に対する聞き取り（生徒の回答）	クロムブックにある英語を学べるアプリ（ＤＭＭや iKnow）を上手に活用し、課題等に取り組んだ。ＤＭＭの英会話は実際に外国人と英会話ができるので、単語の意味や文法は学べるし、単語の発音も学べるところが良いと思った。あと、外国人と楽しく会話することでラフな感じで英語が学べるのも良いと思った。文法や単語の勉強、発音練習をしているよりも、実際の話し方や相手の話していることを聞き取ってそれに対する返答の仕方を学ぶ方が実際に自分たちに身に付く力が大きいため、実際の勉強と並行することによって英会話を楽しみながらテストに向けて勉強することが出来た。	
その他特記事項	アプリは、学校から指示があった時だけでなく。家庭学習に自主的に活用している。	

○３人の取組に共通していること（得られた知見）

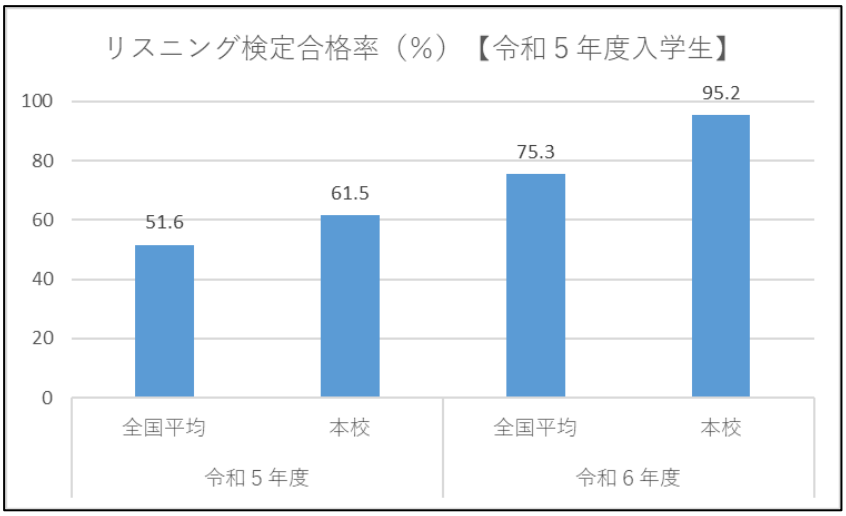
３人に共通していることは、ＤＭＭ英会話を通して、中学、高校１年とで身につけた英語の知識をベースに、前向きに外国人講師と繰り返し対話を行なっていることである。また、外国人講師との英会話レッスンに向けてアプリ「iKnow」等のアプリを活用した自分の理解度に応じた学びを定着させている。このように英会話レッスンに向けた準備、そして英会話レッスンの繰り返しが英語力向上に結びついている。

⑦リスニング英語検定（全国工業高等学校長協会主催）

本検定は、生徒のリスニング力を測ると同時に、工業英語の基礎力育成を目指すために全国工業高等学校長協会が主催して実施しているものである。

昨年度（令和５年度）２年生の合格率は 61.5%であったが、令和６年度２年生の合格率は 95.2%であった。

昨年度の合格率の全国平均は 51.6%、今年度の合格率の全国平均は 75.3%であり、本校の合格率は、昨年度、今年度共に全国を上回っていたが、令和６年度は、令和５年度を上回る合格率となった。このことからも、本事業が令和５年度入学生において、主体的に英語の学習に取り組む態度の変容や学力向上に結び付いていると考えられる。



（５）課題

２年間、英語の学習においてＩＣＴを活用した個別最適な学習に取り組んできたが、学年全体としては、基礎力診断テストでの学習到達度が向上していないことが大きな課題である。併せて、学習実態調査や各種テストの分析、指導を細やかに行い、これまで以上に、それらを学習指導に有効につなげていく手立ての必要性も感じた。

令和７年度は、生徒自身が、個々の学びのスタイルに即して主体的に学習を進めながら、「ＤＭＭ英会話」アプリの活用時間を増やしていくための課題作成、及び、提示の工夫が必要であることを担当者で確認した。

また、事業３年目は、教師がこれまで以上に一人ひとりの生徒に合った個別最適な学習を支援することに重点を置いた取組を推進することとした。

６　３年目（令和７年度）の取組

（１）令和７年度の取組

①　プロジェクト委員会

令和７年６月、校内に「ＤＭＭ英会話」プロジェクト拡大委員会において、「令和６年度最終報告書」「令和７年度実施計画書」「令和７年度目標シート」の内容について確認することで生徒の変容、本校の取組の方向性の共有を図った。

また、アプリを有効に活用して、生徒の英語力向上につなげていく方策について教職員間の共有を図ると同時に、本事業を来年度以降も持続可能なものとするための方策として、探究的な学びや授業のユニバーサルデザイン化に向けての取組を更に推進していく必要生を確認した。

３月の拡大委員会では、アンケート調査による生徒の意識の変容、データの分析内容等の共有を行い、今後の校内における組織的取組について意思統一を図った。

②　教員による県外先進校等視察

令和７年６月から令和８年１月の期間に、プロジェクト委員会教員が中心に「ＤＭＭ英会話」を効果的な活用と併せて、本事業を持続可能なものとし、より発展的なものとしていけるよう、県外への先進校等視察を行なった。

視察内容は次のとおりである。

視察先	視察日	参考になった取組等
・第８回 EDIX 大阪 ・NEW EDUCATION EXPO 2025 大阪 （大阪府）	令和７年６月 13 日 令和７年６月 14 日	・生徒が自律的に学び、探究する力を育むことの重要性を再認識すると同時に、校務効率化に繋がる生成 AI の利活用法について新たな知見を得ることができた。また、これらのことを推進することでＤＭＭ英会話をより生徒主体の取組に昇華していくことができると感じた。
・ヤマザキマザック工作機博物館 ・愛知県立愛知総合工科高等学校 （愛知県）	令和７年６月 26 日 令和７年６月 27 日	・「自分の言葉で考えを伝えることのできる」人材を企業が求めていることを再確認できた。また、ルーブリックを示した上での探究学習の推進により、生徒の意欲の向上、主体性の涵養が図られていて、主体的に学習に取り組む生徒の育成に向けて、多くの示唆を得ることができた。
・宮城県松山高等学校 （宮城県）	令和７年７月 11 日	・インクルーシブ教育を実践していく上において、「何か１つをやれば良い」ということではなく、学校全体で取り組むことの大切さを教えてもらった。このことは、本事業を今後、継続したものにしていく上で大変参考になるものだった。

・教員向け生成AI活用体験サマーキャンプ （東京都）	令和７年８月５日 令和７年８月６日	・目的に合うような自作の AI（カスタム AI）をプロンプト入力によって作成し、ワークシートの作成、画像生成など、効率よく教育活動を行なうことができることを実感することができた。ＤMM英会話等、個別最適な取組を推進していく上で、生成 AI の効果的活用の可能性を強く感じた。
・探究・校務改革支援サービス体験会 in 大阪 （大阪府）	令和７年８月 19 日	・生徒の主体性を育む探究学習をサポートするツールや、教員の校務負担を軽減するためのＩＣＴサービスが、非常に多様化・高度化していることを実感した。特に、各事業者のブースで直接サービスを体験できたことは、カタログだけでは分からない具体的な操作感や、本校の課題解決への糸口を得る有益なものだった。
・兵庫県立三田西陵高等学校 （兵庫県）	令和７年 10 月９日	・生徒が自分にとって必要なことに取り組んでいく「個別学習」のことや、ユニバーサルデザインの視点を教員に浸透させるには、教員自身が五感で理解できるような研修が必要であることを教えてもらった。以上のことは、今後の本校の教育活動を「生徒を主語」にしたものにしていく上で大変参考となるものだった。
・京都市立京都工学院高等学校 （京都府）	令和７年 12 月 17 日	・探究活動を通して、教科学習と社会を結びつけ、生徒が主体的に学び、発進する仕組みが確立されていた。フロンティア数学科では、数学で学んだ内容を実社会で活用する取り組みが行なわれており、宮大工の会社での作業を通して、教科学習が実務につながる具体例が示されていた。
・愛知県立愛知総合工科高等学校 （愛知県）	令和８年１月 28 日 令和８年１月 30 日	・課題研究成果発表会の中で、異学年交流の様子や評価用ルーブリックを活用した多角的な評価方法、更には、分野別指導体制の確立など大いに参考になった。本校における生徒主体の学習活動の推進に活かしていきたい。

③　授業におけるＤMM英会話の活用

プロジェクトチーム全体で取り組む体制を改めて確認し、ＤMM英会話アプリの受講回数を前年度の 10 回から年間 12 回へと拡充し、年間を通じて英語に触れる環境を維持する計画を策定した。

ア　主体的なレッスンへの発展

従来の講師主導による慣れの段階から、生徒が主導権を握る活動へと工夫を凝らした。講師へのインタビュー形式を導入し、生徒自らが質問を準備することで、能動的に対話を進める姿勢を養った。また、グループプレゼンテーションでは「探究的・協働的な学び」を目指し、役割分担シートを用いて共同でスライドを作成するプロセスを重視した。

イ　授業実践の深化（探究的・協働的な学びの展開）

本年度は、単なる英会話体験から一歩踏み出し、英語を「自分の専門や考えを伝える道具」として活用する以下の具体的なプロジェクトを展開した。

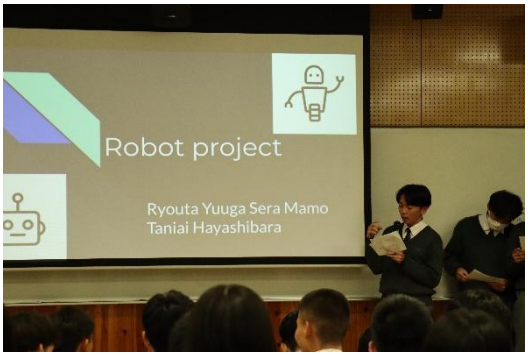
ａ　「おにぎりアクション」を通じた国際理解と発信型プレゼンテーション（９月～）

身近な「おにぎり」を切り口に、世界の飢餓問題や SDGs への視野を広げる探究活動を実施した。ＳＮＳにおにぎりの写真を投稿することでアフリカ・アジアの子どもたちへ給食が寄付される「おにぎりアクション」に参加し、自身の行動が社会貢献に

直結する体験を提供した。グループ発表に向けては、構成からスライド・原稿作成までを生徒主体で進行した。DMM英会話の講師に対する個別のプレ発表で得たフィードバックをグループへ還元し、内容を多角的に改善した。オンライン講師やクラスの生徒など、多様な聞き手に対し「いかに説得力を持って伝えるか」という発信態度と、協働的な問題解決プロセスの深化を重視した。

b　「課題研究」との連動

３年生が課題研究で取り組むロボット製作や建築模型の製作過程について、英語でグループ発表を行う活動を実施した。専門的な研究内容を英語で説明するという高度な挑戦であったが、図面や模型を画面共有しながら説明することで、実社会に繋がる発信力を養った。



c　「My Future Dream」マンツーマンレッスン

自身の将来の夢について、外国人講師に直接語りかけるレッスンを行った。25 分間のフリートークの中で、自分のキャリアパスや情熱を英語で表現し、多様な価値観を持つ講師と対話することで、自己肯定感の向上を図った。

年間 12 回「DMM英会話アプリ」活用計画表（R７年度）

時期	受講場所	内容・目的	回数
春休み	自宅	休暇中の継続的な英語接触（課題）	2 回
1 学期	授業中	通常レッスン受講、システムの再確認	1 回
夏休み	自宅	自発的な学習習慣の定着（課題）	3 回
2 学期	授業中	プレゼンテーション披露（フリートーク）	1 回
冬休み	自宅	3 年間の総まとめとしての受講	1 回
3 学期	授業中	卒業前の最終レッスン受講	2 回
通年	自宅	今後の自主学習としての割り当て	2 回
合計			12 回

（２）　令和７年度の成果

①　意識アンケート結果による意識の変容

３年間の継続的な取組の結果、生徒の意識には明確な変化が生じた。特に「英語の大切さ」や「異文化への興味」の数値が上昇しており、オンラインで世界中の講師と接したことが、生徒の視座を広げる結果となった。

【表２】英語に関する意識アンケートの変化（１年時８月・３年時１月）

質問項目	１年次８月（R５）	３年次１月（R７）	変容のポイント（生徒のコメントを参考）
英語を学ぶことは大切だ（とてもそう思う）	45.3%	49.0%	継続的な英会話経験により、有用性を再認識した。
外国や異文化に興味がある（とてもそう思う）	20.2%	29.2%	オンラインで多国籍な講師と接し、視野が広がった。
海外の人と積極的に交流したい（とてもそう思う）	35.0%	20.1%	交流の難しさを知った「経験による変化」と分析。

アプリ活用時間（30 分以上）	2.8%	10.0%	家庭学習時間の確保という課題に改善が見られた。

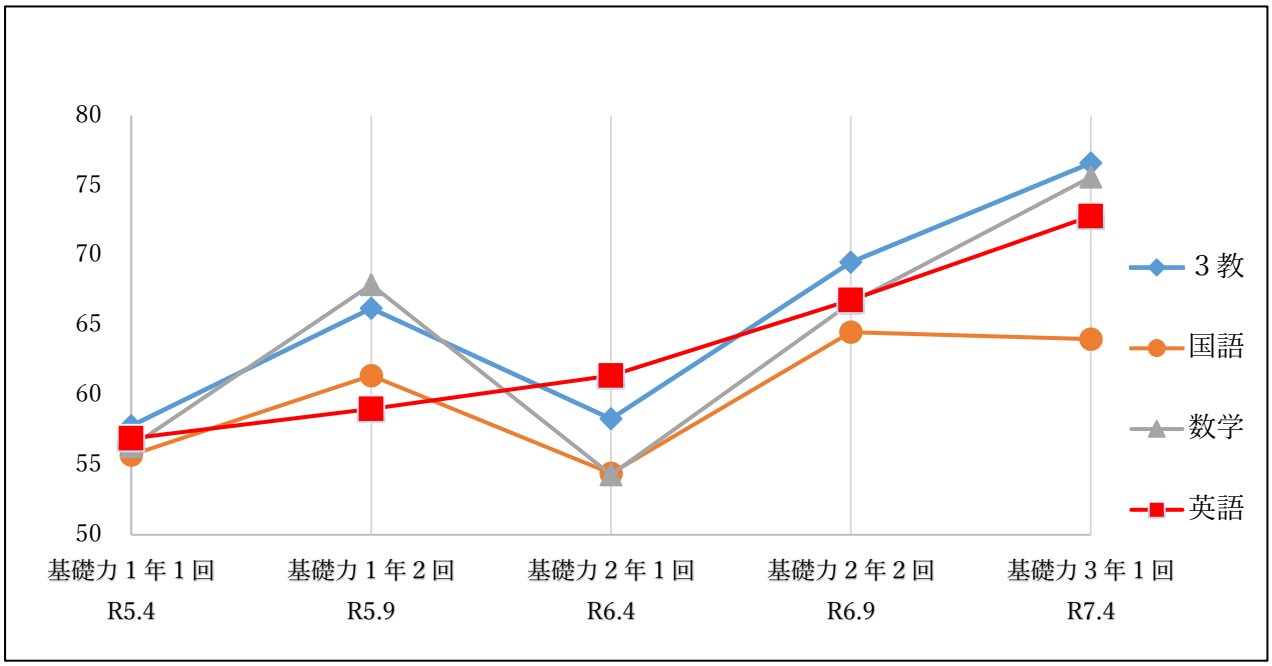
「海外の人と積極的に交流したい」と回答した生徒の割合が減少したが、これには入学時に漠然といただいていた国際交流のイメージが、３年間の活動を通じて精緻化されたことを示している。聞き取りをした生徒によれば「外国人を話すということにプレッシャーを感じてしまい、英語を学ぶ意欲が低下してしまう。コミュニケーションは聞くことが大切だが、知らない単語や聞き取りにくかったりしたため鍛えることができなかった。」とのことで、時にはうまく伝わらず落ち込んだり、会話が期待通りに進まず不満を感じた回もあったということが分かった。そんな中でも「外国や異文化に興味がある」と答えた生徒の割合が上昇していることは、困難にめげず交流を続けた生徒が、3 年間の国際交流の経験を通して、文化の摩擦を乗り越えて異国の方と価値観を共有する経験を重ねることで、国際交流に対する考え方が変わる生徒が着実に増えてきたことを示している。

② 基礎学力診断テストの推移

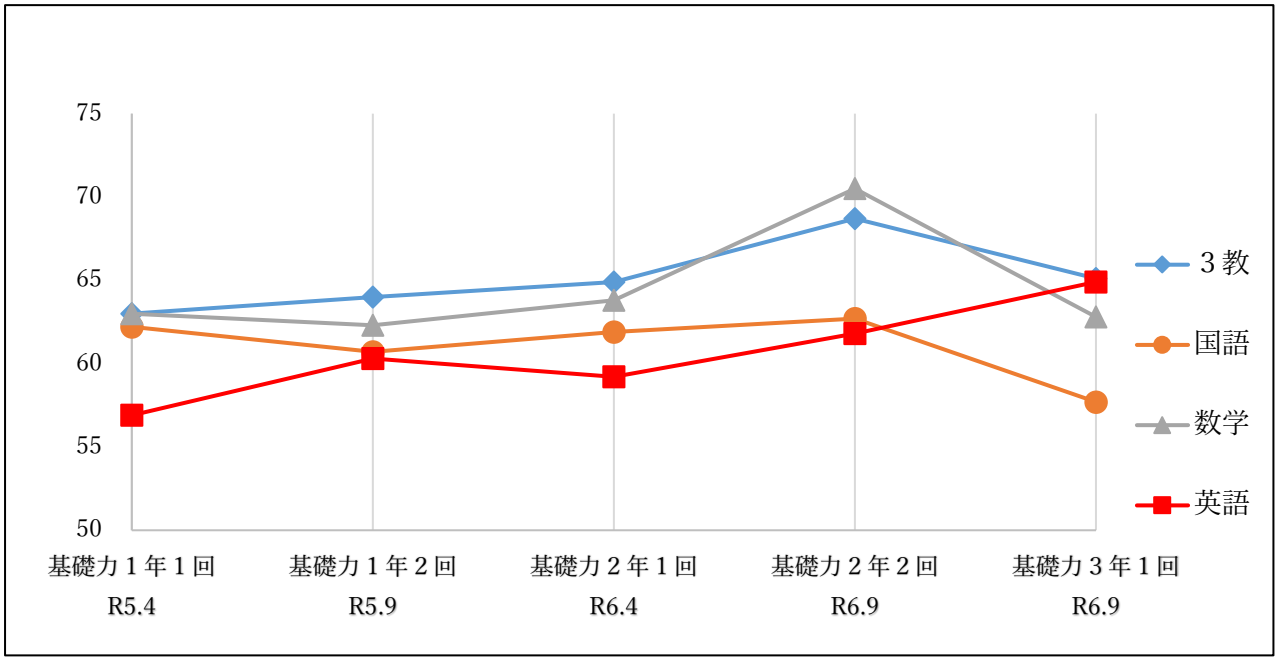
全 12 回の課題を完遂した生徒において、英語の偏差値が大幅に上昇する傾向が見られた。ＩＣＴ活用により「英語に触れる環境」を維持し続けたことが、学力向上の強力なブースターとなった。

【表３】基礎学力診断テスト 英語偏差値（校内）の推移

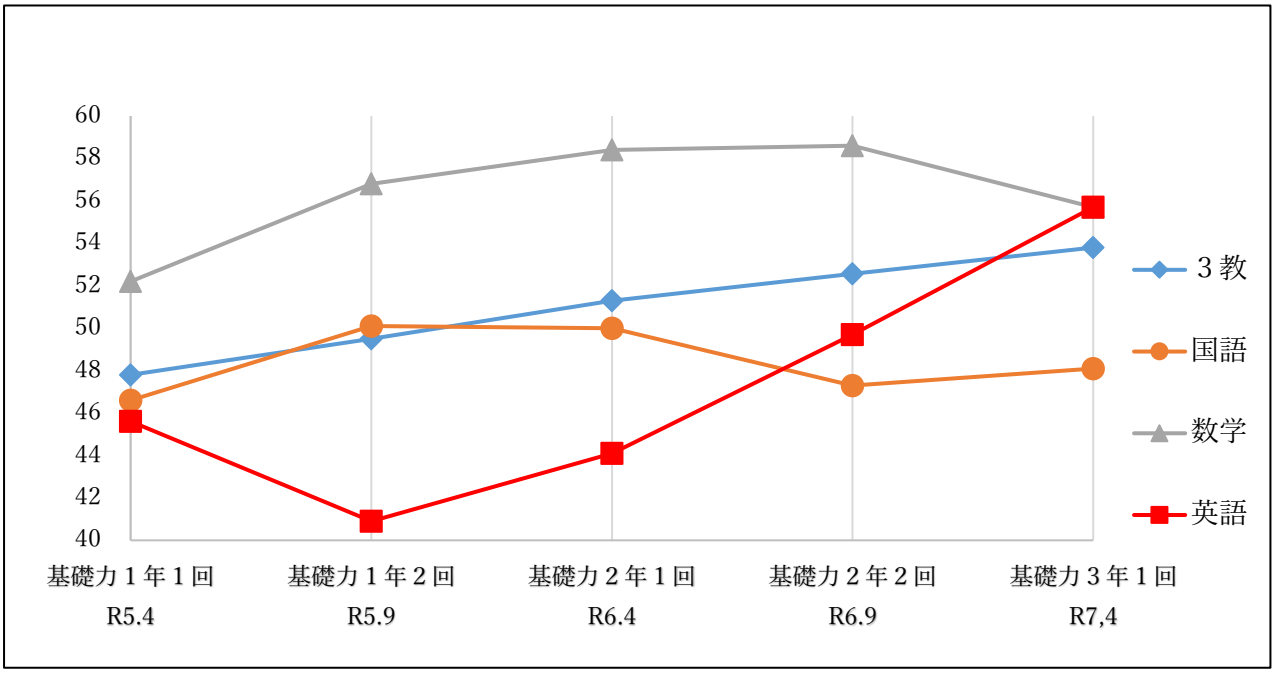
対象生徒	１年４月	３年４月	３年夏課題考査	最終的な主な実績
生徒Ａ	56.9	72.8	75.5	英検準１級合格、国公立大学合格
アプリの活用状況				
平日活用時間平均１時間以上				



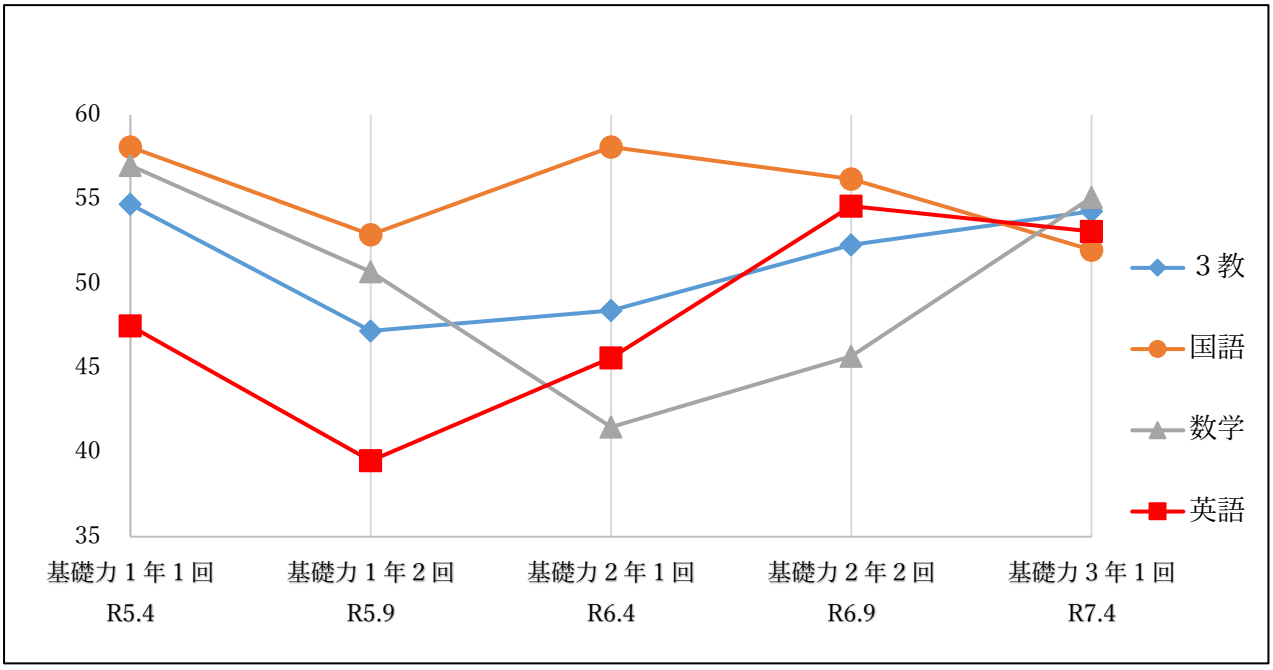
対象生徒	１年４月	３年４月	３年夏課題考査	最終的な主な実績
生徒Ｂ	56.9	64.9	74.7	リスニング英語検定１級合格
アプリ活用状況				
平日活用時間平均１時間以上				



対象生徒	１年４月	３年４月	３年夏課題考査	最終的な主な実績
生徒Ｃ	45.6	55.7	73.2	３年次に集中的な取組で急伸
アプリ活用状況				
平日活用時間平均１時間以上				



対象生徒	１年４月	３年４月	３年夏課題考査	最終的な主な実績
生徒Ｄ	47.5	53.1	54.0	リスニング英語検定２級合格
アプリ活用状況				
平日活用時間平均１時間以上				



③　担当教員から見た生徒・授業の変容

（マインドの変容《不安から自信へ》・行動の変容《学習から自己実現へ》）

導入当初、マンツーマンのレッスンに対して「胃が痛い」と怯えていた生徒たちが、今では笑顔で身振り手振りを交え、対話を楽しめるようになった。言葉が詰まっても自力で言い換えたり、チャット機能を併用したりと、コミュニケーションを継続しようとする粘り強さが養われた。

また、英語を単なる暗記対象ではなく、自分の考えを伝えるための「自己実現の道具」として捉え直した点が最大の変容である。その意欲は、おにぎりプロジェクトや英語での課題研究発表において顕著に表れた。工業高校という環境にありながら、ＩＣＴを通じて英語に触れ続けた結果、英検準１級の取得や国公立大学の英文学科合格等の実績を残す生徒を輩出した。個人で 25 分間のフリートークを完走し、未知の相手と渡り合う「発信力」を身につけたことは、従来の座学中心の授業では実現できなかったと思われる。

「企業の海外事業所とのオンライン国際交流」では、企業からの説明の後、質疑応答の場面で、英語で堂々と質問する生徒の様子は、ＤＭＭで培われたコミュニケーション能力、自信の表れてあるように思われる。

④　教員の変容（指導から伴走へ）

生徒の変容に伴い、教員の意識も変化した。従来の「知識を授ける指導者」から、生徒が世界とつながるプロセスを支える「伴走者（ファシリテーター）」への転換が図られた。具体的には、正解を教え込むのではなく、生徒一人ひとりが抱く「伝えたい」という欲求を、いかにＩＣＴを効果的に活用して形にするかを支援する姿勢へと変化した。ワークシートの作成や個別面談、放課後指導など、多くの時間を生徒のサポートに割く中で、教員自身も「生徒が自律的に学びを深めていく姿」から多くを学ぶこととなった。教える立場から、生徒の可能性を広げるための環境を整える「コーディネーター」としての役割が、これからのＩＣＴ教育における教員の核になるだろう。

⑤　ＩＣＴ活用

ＤＭＭ英会話アプリを核としつつ、複数のツールを複合的に活用し、個別最適な学習を支えた。

【表４】ＩＣＴツール活用状況一覧

活用ツール	主な用途	生徒の具体的な活用方法
ＤＭＭ英会話	実践	外国人講師との 25 分間マンツーマン対話
Canva / gamma	視覚化	プレゼンテーション用スライドのデザイン作成
Gemini / ChatGPT	構成・添削	自分のレベルに合わせた英作文の構成、表現の調整
Google 翻訳 / DeepL	補助	単語やフレーズの即時確認
Padlet	共有	クラス内での成果物共有、相互フィードバック

「ＡＩや翻訳ツールがあれば、英語は怖くない」という安心感が、結果として生徒の自発的な学習（カタカナでの発音確認や音読練習）を支える形となった。1 年生の頃からは想像できないほど、生徒たちは頼もしくＩＣＴを使いこなし、自律的に学習を進める術を習得した。

（３）課題

英語での発信に対する抵抗感の払拭と、多様なＩＣＴツールを使いこなすスキルは完全に定着したが、学習習慣の定着が不十分であり、年度当初実施の基礎力診断テストＧＴＺ（英語）Ｄゾーンの割合が、63%であり、目標の 50%台に到達することができなかった。生徒面談やアンケート調査を継続的に行ない、生徒の学習意欲の涵養を引き続き図っていきたい。今後は、特定のアプリの有無に関わらず、ＩＣＴを日常的に活用する活動を継続し、学習習慣の定着を図る必要がある。

7　３年間の取組総括（得られた知見）

３年間の取り組みを通じ、生徒・教員双方が「学びの形」を再定義し、以下の５つの観点で顕著な変容と知見が得られた。

ア　英語に対する意識の変容

当初は英語を「暗記対象」と捉えていた生徒が多かったものの、3 年間を通じて「英語＝自分の考えを伝えるためのツール」という認識への転換が図られた。

「間違いを恐れずにアウトプットする場」を継続的に提供することで、英語を「学問」から「コミュニケーションの手段」として自分事化させることに成功した生徒が多数見られた。

イ　成績伸長者に見られる自律的学習の定着

成績を大きく伸ばした生徒には、明確な行動サイクルが見られた。自ら「目標設定」を行い、達成ツールとして「学習アプリ」を戦略的に活用し、日々のリフレクションで成長の「手応え」を実感したことが、結果として「学習習慣の定着」へとつながった。

ＩＣＴツールの活用が単なる作業に終わらず、目標達成の実感（自己効力感）を伴うことで、外部からの強制によらない自律的な学習姿勢が育まれていった。

ウ　成績上位層のさらなる成長

探究的な課題を課すことで、知識の定着が深まり、「正解を出す」段階から、「英語を用いて価値を創造する」段階へと移行した。

エ　自信・意欲・コミュニケーション能力の涵養

「不完全な英語でも通じた」という成功体験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を大きく高め

た。

完璧主義を排し、ジェスチャーや言い換えを駆使して「伝えようとする姿勢」が育まれ、その姿勢が成功に結びつくことの経験が、自信、意欲に繋がっていった。この自信、意欲は他者と関わろうとする積極性として、英語以外の場面にも波及している。

オ　教員の授業観の変容

教員が「知識の伝達者」から、学びをデザインし並走する「ファシリテーター」へと役割を劇的に変化させた。

教師主導の講義形式を抑え、生徒の「つまずき」を学びのチャンスと捉え、対話を重視する授業スタイルが教員集団の共通認識として定着した。

この３年間で得られた最大の知見は、「適切なツールの提供と目標設定の支援が、生徒の学習を『受動』から『能動』へと変える」ということである。特に成績伸長者が示した「目標→手段（アプリ）→手応え→習慣化」のモデルは、今後の指導における大きな指針となりうる。

８　おわりに（学びを「文化」へと昇華させるために）

本校はこれまで３年間にわたり、本事業を通じて、ＩＣＴの利活用、英語学習への意識改革、そして、基礎学力の定着に邁進してきた。こうした多角的な取組の中で、令和６年度後半から令和７年度にかけて最も大きな変化として現れたのは、生徒たちが「楽しみながら」学習に向き合う姿が随所で見られるようになったことである。様々な挑戦と経験を積み重ねる過程で、自信や意欲といった非認知能力が着実に育まれ、それが「楽しむ」という前向きな姿勢へと結びついたものと確信している。また、生徒一人ひとりの学習到達度や意欲にあった最適な課題に取り組ませることで、生徒が意欲的に取り組むことにつながった。これは、学習サービスやアプリの使用に関わらず、授業づくりにおいて重要なことであることが改めて確認できた。

今、私たちは重要な分岐点に立っている。この「楽しむ姿」を一時的な高揚感で終わらせるのか、あるいは自律的な「学びの習慣化」へと昇華させることができるのか。今後は、１人１台端末や生成ＡＩ等も活用しながら、個別最適な学びを実現し、自律的な学習者を育成していきたい。併せて、生徒たちが主体性を発揮し続けられる「学びの環境」のさらなる整備と、指導のあり方の探究を止めることなく、本校の教育活動を次なるステージへと進めていきたい。